# み言葉に求めた人間の真実
# 太宰治と聖書

鈴木範久　すずき　のりひさ　立教大学名誉教授

「入院中はバイブルだけ読んでゐた」（１９３６年）

「旅行中もただ聖書ばかりを読んでゐました」（１９４１年）

太宰治の全集（筑摩書房刊）を読んでいると、たびたび、このような文章に出会う。

その作品は、戦後の青年のみならず、現代の学生諸君にも依然として愛好されている。日本文学科はもちろん、キリスト教学科の学生のなかからも、卒業論文に太宰を取り上げる人達が絶えないからである。いや、若者だけでなく、私のような高齢者にもいまだおもしろい。

それは、やはり太宰が、人間の真実を鋭くつく作家だったためと思う。そして太宰に、人間の真実をつかせたものに聖書があったように思う。そのことがあってか、最近の太宰研究において目立つ傾向は、太宰と聖書との関係である。単行本だけでも、佐古純一郎編『太宰治と聖書』（教文館／１９８３）、赤司道雄『太宰治―その心の遍歴と聖書』（八木書店／１９８５）、田中良彦『太宰治と「聖書知識」』（朝文社／１９９４）、『野原一夫』太宰治と聖書』（新潮社／１９９８）と続けて刊行されている。

太宰治と聖書との出会いは、１９３２（昭和７）年の共産主義運動からの離脱のあととみなされる。作品では、１９３５年10月に発表された『もの思ふ葦』のなかで、「太初に言あり……」で始まるヨハネ伝冒頭の言葉が引かれている。

実は、この年の夏、太宰は、画学生の鰭崎潤と出会う。鰭崎潤の兄轍は、内村鑑三の聖書研究会に出席していた。内村はすでに5年前に世を去っていて、弟の潤は内村門下の塚本虎二の集会に出ていた。潤によると、太宰に、内村の著書『基督信徒の慰』『求安録』『一日一生』、塚本の雑誌『聖書知

『聖書知識』（聖書知識社 発行）

識』などを持参したという（筆者への談）。

同年暮、湯河原、箱根の旅に出た太宰は、その間、内村鑑三の「随筆集」に「ひきずり廻されたことを告白」した（『碧眼托鉢』）。これは岩波文庫の『内村鑑三随筆集』とみてよい。塚本の雑誌『聖書知識』は１９４０年ごろから購読し、同誌と太宰の作品との関連が明らかにされつつある。太宰は、しだいに聖書に親しみはじめ、その聖書との関係は、戦中をへて戦後の死に至る日まで続く。

太宰の作品や書簡に現れる聖書の言葉は、新約聖書では四福音書、使徒行伝、ロマ書、コリント後書、テモテ前書、旧約聖書では創世記、出エジプト記、申命記、サムエル後書、詩篇、伝道の書、イザヤ書などである。なかでもマタイ伝が際立って多い。

太宰治の書（大高喜久江氏旧蔵）

引用された聖句の文章を見るかぎり、用いられた聖書は、新約聖書では、１９１７（大正６）年に改訳されたいわゆる「大正改訳」である。旧約聖書は改訳されなかったので１８８７年に訳了された文章が使われている。太宰は、たぶん改訳の新約聖書か、旧約も含めた一冊本の聖書を読んだであろう。しかし現物は度重なる転居で散逸し残されていない。おそらく必要に応じて買い求めていたと思われる。最近になり、敗戦直後にアメリカで印刷された小冊子『ルカ伝福音書』一部だけが見いだされた。

太宰と聖書の関係につき、さまざまな見方ができる。ここでは二点だけ指摘したい。

第一は、太宰が好んで用いた聖書の言葉「己を愛する如く隣人を愛せよ」と、「大正改訳」の「己のごとく汝の隣を愛すべし」（マタイ19・19）との類似しつつ相違する点である。太宰の使い方をみると、わずかな出入りはあっても常に「愛する如く」と「隣人」の表現で用いている。このような定型的表現は、太宰において、この聖句が、その語句のまま深く刻み込まれていることを物語る。（ちなみに『内村鑑三随筆集』では「自己を愛する如く吾人の隣人を愛すべきなり」と記されている。太宰はこちらに近い）。同じことは「空飛ぶ鳥を見よ、播かず、刈らず、蔵に収めず」にもいえる。「大正改訳」では「空の鳥（マタイ6・26）であるのに太宰は常に「飛ぶ」を入れている。これもほぼ一貫している。

第二は、この「隣人を愛せよ」と「空飛ぶ鳥」との間にあろう。これらの言葉をはじめとする太宰と聖書、あるいはキリストとのことを考えるとき、そこに展開している心景は『歎異抄』の世界に近い。それも倉田百三が『出家とその弟子』で描いた「善鸞」の像と重なる。「苦悩」する近代人を「そのまま」、「自然」のまま認める世界である。太宰にとり聖書は、この近代人の「救済なき救済」を示すことによって、太宰を、その人生においても作品においても「救済なき救済」にかかわらせた書物であった。